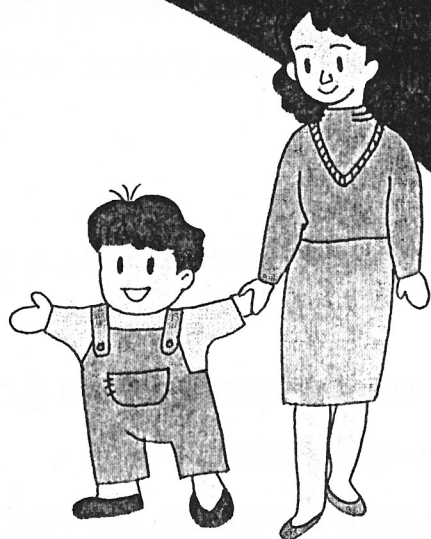


# 熱性けいれんの 予防法について



お母さま方へ

乳幼児期(生後6ヵ月から4~5歳まで)には、  
発熱時にけいれん(熱性けいれん)を起こすことが  
たびたびあります。熱性けいれんが起こりやすい  
お子さまには、発熱時に抗けいれん薬(ジアゼパ  
ム坐薬)を使用するのがよいでしょう。この方法  
により、熱性けいれんを予防することが可能です。

裏面にその使用方法を記しますので、よくお読  
みになって、発熱時に適切に対処して下さい。

# ジアゼパム坐薬の使用法

(DIAPP坐剂)

熱性けいれんは体温が急激に上昇するときに起こりやすいので、 $37.5^{\circ}\text{C}$ 前後の発熱に気づいたときには、できるだけ速やかにあらかじめ処方されている坐薬（ジアゼパム坐薬）を1個肛門内に深めに挿入して下さい。

そして、 $38^{\circ}\text{C}$ 以上の発熱が続く場合には、8時間後にもう一度だけ坐薬を挿入して下さい。2回目挿入後は、さらに発熱が持続しても、原則としてそれ以上坐薬を使用する必要はありません。坐薬を使用した際には、挿入後30分間は坐薬が肛門からもれていないことを確認して下さい。坐薬が明らかにもれた場合には、新たに挿入しなおして下さい。

この方法により、発熱初期の挿入のタイミングさえ失しなれば、ほとんどの場合熱性けいれんを予防できます。

一時的に多少のねむけ、ふらつきが出現したり、ときには興奮状態になることがあります。ほかには問題となるような副作用はありません。

医師の説明をよくお聞きになって、上記の方法により熱性けいれんの予防につとめて下さい。

なお、坐薬を使用した場合には、発熱の状況や坐薬の使用時間などをメモし、次回来院時に提出して下さい。坐薬が適切に使用されたかどうかを判断します。

(ジアゼパムの血中濃度の推移)

